



TITLE:

Historical Formation and Changes of an Inland Trade Center in Central Borneo(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Sakuma, Kyoko

CITATION:

Sakuma, Kyoko. Historical Formation and Changes of an Inland Trade Center in Central Borneo. 京都大学, 2015, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19100>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	佐久間香子
論文題目	中央ボルネオにおける内陸交易拠点の歴史的形成と変化		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、マレーシア・サラワク州のトゥトー川最上流域に広がる森林で狩猟採集される林産物の交易拠点であった村落の形成過程と、そこでの社会生活の持続と変化を歴史的視点から描き出す研究であり、著者は2010年から2012年にいたる合計10箇月間のフィールド調査と文献収集から得られたデータにもとづいて論述を展開している。</p> <p>序章では、調査地域をふくむボルネオの人類学的な先行研究を広範に検討し、その大半が個別の民族に焦点をあわせ、その本質をなす文化を明らかにする研究であったことを論じている。そのうえで、多様な民族が混住し、協業してきた調査村（ロング・テラワン村）の状況を適切にとらえるには、それが交易拠点として形成されてきた歴史的経緯をふまえる必要のあることを論じ、本論文の全体的な問題設定をおこなっている。</p> <p>第1章では、ツバメの巣を主な輸出品とする交易がボルネオ内陸部と中国大陆を結ぶ東南アジアの海域世界に広がる交易ネットワークにそっておこなわれていた19世紀から20世紀前半までの時代状況を明らかにしている。そのうえで、内陸河川交易の最上流部に位置する調査村（ロング・テラワン村）には、親族関係で緊密に結ばれた多様な民族が混住し、ロング・テラワン村の後背地をなす広大な森林において市場価値の高い林産物の狩猟採集を分業によっておこなっていたことや、ロング・テラワン村は下流域の村々と縁組をおこなうことで、民族をこえた親族関係の紐帯を形成し、交易品を下流の交易中継地へと安全に移送していたことなどを詳細に記述している。</p> <p>第2章で扱われるのは、第二次世界大戦の終了から1990年代までの状況である。サラワク州の多くの地域では1960年代から開発政策の一環として伐採事業がおこなわれるようになったが、ロング・テラワン村の人々が狩猟採集をおこなっていた広大な森林は1974年にグヌン・ムル国立公園に指定された。その結果、ツバメの巣をはじめ狩猟採集活動の多くが制限され、ロング・テラワン村と州政府との関係は緊張をはらんだものとなっていった。また、ロング・テラワン村の交易拠点としての役割は著しく低下していった。その一方で村人たちは、国立公園の縁辺に分村（ムル集落）をつくり、公園関連の仕事に従事することで現金収入を得るとともに、国立公園の内外で狩猟採集をおこないつつけた。第2章は、このように生業活動が多様化していく過程を、フィールドワークと文献調査から得られた資料を丹念に分析することで精細に描き出している。</p> <p>第3章では、2000年にグヌン・ムル国立公園がユネスコ世界自然遺産に登録された後の状況を扱っている。2002年、公園に隣接するムル空港に50人乗りのジェット機が離着陸できる滑走路が整備された。そのためグヌン・ムル国立公園における観光事業は飛躍的に拡大し、観光事業への就労はムル集落の住民にとって主要な現金収入源となった。他方、ジェット機という高速遠距離移動の手段をえることで、ロング・テラワン村やムル集落からサラワク第2の都市ミリへの移住やミリとの往来が急増していった。その背景には現金収入の増大や都市での教育への関心の高まりなど様々な要因がある。第3章では、これらの多様な要因を析出するとともに、ムル集落の住民が観光事業に従事するだけでなく、国立公園内外での狩猟採集活動を継続しておこなうことで現金収入の増加をはかりつつ、ミリに在住するようになった親族との紐帯をジェット機を利用した狩猟動物の肉の分配などによって緊密に維持している社会生活の複雑な様相を記述している。</p> <p>終章では、第1～4章における記述と分析を要約するとともに、序章で検討した先行研究に立ち返り、本論文の学術的意義についてのべている。その第1点は、東南アジア海域</p>			

世界における交易研究が港市に焦点を合わせてきたが、港市だけでなく港市から輸出される林産物を調達する内陸河川交易にも注目すべきであることや、内陸河川交易が地域社会の形成に大きな役割を果たしていたことを明らかにしたことである。第2点は、村落（ロングハウス）を特定の民族集団に属するものとして把握するのではなく、多様な文化的背景をもつ人々が分業することで交易という生業活動を営んでいたことを具体的資料にもとづいて解明したことである。そして、第3点は、こうした複合的な社会組織の在り方が、後背地の森林が国立公園化されることにともなって生業活動が大きく変化し、ジェット機という高速遠距離移動の手段を利用することで生活圏が急速に拡大した現在においても維持されていることを描き出したことである。

(論文審査の結果の要旨)

ボルネオ、とりわけマレーシア・サラワク州の在来民社会に関するこれまでの研究は、民族集団の社会生活の基底にある文化や民族間の文化的差異を明らかにすることを主な目的としておこなわれてきた。その結果、各民族ごとに多くの研究情報が蓄積されてきたが、多様な民族が混住・混交し、連携・協業しあう様態や、そうした様態が成立する要因や過程は大幅に等閑視されてきた。本論文は、サラワク州のトゥトー川の最上流域に位置し、その後背地に生物多様性の豊かな森林をかかえる交易拠点ロング・テラワン村とその周辺地域の形成と変容を歴史的視点から実証的に描き出すことを通して、上記のような先行研究の問題点を乗り越えようとする試みである。

本論文は以下の諸点において学術的に高く評価できる。

その第1点は、系譜調査と口頭伝承を丹念に織り合わせることで、これまで人類学的にはブラワン人の村（ロングハウス）と見なされてきたロング・テラワン村が、19世紀から20世紀前半まで、実際には緊密な親族関係で結ばれた多様な民族から構成されていたことや、村人たちが分業体制によって交易品となる林産物の狩猟採集をおこなう総合商社的な性格をもつ組織であったことを説得的に論じていることである。その傍証として、ロング・テラワン村が林産物を調達する後背地の広い範囲で、そこが国立公園化される以前、大きな政治的影響力をもっていたことを明らかにしている点でも評価できる。

第2点は、略奪などの危険にさらされがちな河川交易の安全性を高めるために、下流の交易中継基地まで、異なる民族や多くの村落を結びつける親族関係のネットワークがはりめぐらされていたことを広域調査によって実証し、そのことによって河川交易が地域社会の編成に大きな役割を果たしていたことを説得的に論じていることである。また、本論文では、広範に文献を渉猟し、東南アジアの海域世界における交易ネットワークと調査地付近の内陸河川交易がどのように接続していたのかを明らかにしている。ボルネオの人類学研究の多くが民族とその文化的本質に主要な関心をむけてきたことを考えるなら、内陸の河川交易が地域社会の編成に大きな影響をおよぼしていたことを解明した本論文の学術的意義は極めて大きい。

第3点は、交易品の狩猟採集をおこなっていた森林の国立公園化がロング・テラワン村とその周辺の地域社会におよぼした影響について論じていることである。国立公園化にともない、そこでの狩猟採集活動は大きく制限されるようになり、交易拠点としてのロング・テラワン村は衰退していった。しかし、村人たちは国立公園の縁辺に分村（ムル集落）をつくり、観光事業に参加するとともに、国立公園内外での狩猟採集活動をつづけてきた。本論文ではこれらのことを他の生業活動や社会生活の変化とともに巧みに描き出している。ボルネオ在来民社会の現代的変化に関する研究の多くは伐採やモノカルチャー化による生物多様性の縮減の影響を扱っているのに対し、本論文は、森林と生物多様性の保全をはかる国家政策が地域社会におよぼした各種の影響を詳細に記述しており、この点で重要な学術的貢献をおこなっている。

第4点は、国立公園がユネスコの世界自然遺産に登録され、ジェット機が国立公園近くの空港に就航するようになり、観光産業が飛躍的に拡大した2000年代以降の状況にロング・テラワン村の人々がいかに適応しているかを、さまざまな生業活動への就労時間の配分を統計的に分析することで具体的に論じていることである。そこから明らかになるのは、ロング・テラワン村が解体消滅するのではなく、村人たちはムル集落を中心に観光産業に従事するとともに狩猟採集活動を並行しておこない、かつジェット機という高速遠距離移動の手段を利用することで、サラワク第二の都市ミリにも分村をつくり、生活圏の拡大と生業活動の多様化をはかっていることである。こうした記述には、

国立公園化された森林にしがみついて困窮するのでも、都市民や出稼ぎ労働者になってしまうのでもない、ロング・テラワン村の現代的な姿が生き生きと描き出されている。

以上の諸点から、本論文は、地域の生態、社会、歴史の総合的理解を基礎にした地域研究の発展をめざす本研究科の研究成果としてふさわしい内容を備えた優れた論文であると判断できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。